

森林生態系サービスに対する一般市民の評価
—グループインタビュー調査を通じて—
森林・緑地管理学講座 森林政策学分野 藤澤 尚輝

【背景】生態系サービスの経済評価による可視化は、生態系を利用し、保全するにあたり必要不可欠である。その重要性は、ミレニアム生態系評価や生物多様性の経済学（The Economics of Ecosystem and Biodiversity）で幅広く理解されるようになった。陸地面積の約 30%を占める森林の生態系サービス（Forest Ecosystem Service; 以下 FES）がもたらす価値の可視化は特に重要である。

【目的】本研究の目的は、どのような FES がどのような理由で高く評価されるのか、その理由をグループインタビュー調査に基づいて明らかにすることである。本研究に先立ち、一般市民を対象とした FES に対する環境経済評価手法による評価が行われている。この評価結果は FES に対する一般市民の評価を明らかにしているが、どのような FES がどのような理由で高く評価されるのかまでは明らかにされていない。環境経済評価手法による評価結果は、費用便益分析の視点から森林・林業政策の可否を判断する上では有用であるが、森林・林業政策に対する人々の支持や実施可能性について考えるには、FES に対する人々の考えを定性的に把握することもまた必要である。

【手法】グループインタビュー調査は、ファシリテーター1名、参加者6名からなる120分のセッションを、参加者を変えて6回行った。各セッションでは、前述の環境経済評価手法による評価結果を参加者に提示し、その結果に同意できるかどうか、なぜ同意できるかあるいはできないかの視点から議論を開始してもらった。前述の評価では、「水資源を蓄える働き」「空気をきれいにしたり、騒音をやわらげたりする働き」「二酸化炭素を吸収することにより、地球温暖化防止に貢献する働き」「山崩れや洪水などの災害を防止する働き」「土壌の流出を防いだり、肥沃な土壌を維持したりする働き」「飲み水にも使われる河川や湖沼の水をきれいにする働き」の6つに対して特に高い評価が与えられているので、このFESを中心に議論を行ってもらった。発言内容は議事録として記録し、定性データ分析ソフト MAXQDA を用いて、文書にコード（小見出し）を割り振って発言内容のグループ分けを行い、どのような文脈でどのような発言がどのような頻度で行われたかを整理した。また、グループインタビュー調査の前後に FES の評価に関するアンケート調査も実施し、グループインタビューでの議論内容が、FES の評価にどのような影響を与えているのかについても明らかにした。

【結果と考察】グループインタビュー調査の前に行ったアンケート調査の結果から、参加者の FES に対する評価は、前述の環境経済評価手法による評価結果を同じ傾向を有しており、上記の6つの FES に対して高い評価が与えられていた。議事録に対する分析の結果、FES の代替可能性の有無が評価に大きく関係していることが推察された。具体的には、「森林以外のものでは代替できないから、水資源を蓄える働きが、一番大事だと思った。」「美しさを感じたり、文化や芸術、デザインの源となったりする働きは、必ずしも森林だけが負わないといけない機能ではないと思う。」といった発言が複数の参加者から聞かれ、このような議論は6セッション全てで展開されていた。また、議論を受けたグループインタビュー調査後のアンケート調査の結果は、調査前に行った結果と大きくは変わっておらず、FES の代替可能性の有無という視点は、セッションの参加以前から多くの参加者の間で共有されていたと考えられた。森林・林業政策を行うにあたり、前述した6つの FES が失われることがないように進めることが、人々の支持や実施可能性を高める上で重要であることが示唆された。